

言語を説明資料とすること

藤岡勝二

研究を目的とせられる當學會の話としては極めて不適當であるかも知れませぬが、今日は、掲げて置きました通りに、言語を種々の説明材料に用ひることに就て申上げて見たいと思ふのであります。

およそこの言語のことはちよつと披ひ易い爲に、如何なる人でも、これに就て多少の理窟を言ふものでございます。人々が寄合ふと、互に其國の言語に就て批評が始まつたり、或は、どの語がどれに相當するとかしないとか、或はこの語はどう云ふ譯だらうなどと語りあつて、各々いろいろに其解釋を試みたりするものであります。是だけでも、随分、一座がもてる事が屢々あるのであります。即ち、何人でも多少言語のことに就ては話をする事が出来るのであつて、それ位、言語のことはやさしく問題にせられるのであります。随て、誰でも早く判断を付けて了つて、早飲込になる弊も、少なからず之に伴つて來るのであります。全くの坐興としたり、又は口合のやうなことをしてゐるのには、一向罪もありませんが、頓智とか頓才とかいふべき類でなくて、本氣にこじつける様なことになりますと、そこに弊が生ずるものであります。依て言語をいろいろの證據に取つたり引合に擧げたりする場合には、なか

注意を要するのであります。これに就ては様々複雑な事がありますが、それを悉く説き明かす違はありませぬから、極簡単に、僅かだけを申しまして、さうして我國の國と云ふことゝ、我國の社會と云ふことゝ、我國の言語と云ふことゝの關係に就て、御話して見たいと思ふのでございます。

一 昨年夏のことでございましたが、私が洋服を一つ拵へやうと思ひまして洋服屋を呼びました所が、され地の見本を見せてくれました。「是はセルだらう」といふと、「ハイそれはセルでございます」「此方は？」「それはサージと申します」「成る程さうか。しかし、サージと云つたつて、セルジと云ふのと同じ事なのだが、サージとセルジとどこか違ふのか」と言ふと、「それはモウまるて物が違ひます」と言つてゐました。そこで、私は大變可笑しく思つたのであります。なぜなれば、セルと云ふのは、セルジといふ語の末のジを略して云つたまでゝ、セルはセルジのこと、セルジは即ちサージで同じ事であるからであります。同じものを向ふては違ふものとして、一方はセルと稱し、一方はサージと稱してゐますところが奇態なのであります。なぜこんな事になつたかと、能く考へて見ますと、從來これはネル等と同じ格の外國品として、音も似てゐるところから、セルソ〜と言つて、夙くから我國に入込んで了つたので、本當の形のセルジと言ふ語に就ては、其セルジのジは蒲團地だの羽織地だのと云ふチと解釋して、つまり、上の半分がその品名を示す他國の語で末の方が日本語だと思ひこんで、居たのであります。これに反して、サージの方は、「サーの地」とも考へにくい形の語であるものですから、これはサージとして心

得てしまつて、セルとは違つたものとしたのであります。つまり、この外國語の末のジを勝手に解釋したのが、こんなことになる基であつたのであります。かういふなのが俗間にはよく起る解釋法でありまして、我が國に限らず何れの國にも澤山あります。即ち自分が手近に知つて居る材料でもつて簡單に解釋をして丁ふのです。これは何人にもよくある癖で、随分深く學問をした人でも屢々あることであります。我々は之を俗流語源説、又は俗間解釋法と稱して居ます。これは「dictionary」を「字引く書なり」等といふ類としますれば、或場合には、變つた語を覺る一方法として、都合の好いこともありますけれども、これを解説として、ほんとする様になると、大きに誤りを傳へることになりますから、注意がゐる必要があります。

この類の例はいろいろあります。もう一つ舉げて見ませう。東京等で子供が白い前掛を胸から腹に掛けてズット下まで垂らします、あれをアブラヤサンと云つてゐます。上方ではそんなことは言ひませぬが、當地等では申します。實際これを油屋の前掛から來た語だ等といふ人もありますが、どうも油屋さんが白い前掛を掛けては、半日もやり切れるわけのものではありません。あれは油屋には關係はありません。誰が誤つたか知れませぬが、元はエープロンといふ語で、それを俗流に解釋して、音から似通ひを認めて、いゝ加減に油屋などゝして、それにサンを付けてアブラヤサンとしたものです。これもセルジのジと同様に音の上から勝手に思切つた解説をつけるからであります。ことさらに誰が發明して云

ひ出したといふ程やかましいものではないけれども、何時の間にかその了簡が俗間に行はれて、それが一般に用ひられたのであります。

横濱が初めて開けた頃に外國から來た使節の人をメリケンミニスター、或はイギリスミニスターと言ふて居ましたが、その内、このミニスターと云ふ語を日本語の様に扱つて、メノシタと云つて、「目の下」と心得る様なことになり、イギリスメノシタとか、メリケンメノシタとか、皆メノシタ(眼の下)にしてつたものであります。餘程大なる意氣込であります、これも全く俗流の解釋であります。目立つて誰が初めたともなしに、全く、手輕に分り易い所で片付けて了つて、随分笑ふべき、滑稽なことにもなるのであります。さればこそ、落語などにこれがよく種になつて來るのであります。落語では、ことさらに作るのではありませんが、日常の言語には、ことさらでなく、何時の間にか、案外な説が成立つて來るものであります。

實際それ程極端ではないが之に似た事をやはり吾々が眞面目にやるのが少くありません。學者がなか／＼これを武器とすることがあります。昔神學の先生達が道話をするときに「心と云ふものは兎角變り易いものであるから氣を付けなければならぬ、意馬心猿と云ふて眞に取留めの仕悪いものであるから各々しめく／＼りをしなければならぬ、心とはコロ／＼と云ふことで、コロリ／＼として眞に据りがないからコ、ロと云つたものだ」等と解釋をして居ますが、これが、一向諸書を調査して立てた説でも何でもな

く、思ひ付きに、都合よく云つてゐるものらしいので、しかもそれで皆も得心して聽いて居つたし、先生も無論眞面目であつたのであります。目的は人をよく導く爲であるから、こしらへ事にしても敢て咎むるには足りませぬが、方法そのものはやはり、俗説の解釋法の類であります。

その俗流の解釋法は以上の様に二つあることが認められます。一つは内國語に對して内國語を以て解釋を施す事、一つは外國語に對して内國語を用ひて解釋を施す事であります。前に擧げたやうなのは外國語に對して内國語的解釋を與へたもので、後に申したのは、日本語に對して日本語的解釋をして、心得の爲に供したり何かするものであります。内國語に對して内國語を用ひて解釋することは支那にも盛に行はれたことでありまして、例の通音の語を以て、たとへば「仁は人なり」、「義は宜なり」と云ふやうなことを申すのは、やはりそれでありませぬ。仁は人なり。仁と云ふのはそれは人と云ふ字に當る、人たることである。義とは宜なり。事の宜しきで、よろしいと云ふことと同じ事であると云ふやうに解釋をするのは、つまり同じ様な音で説明をして行くやり方であります。此の類の中には無論眞實に當つて居るものもありますが、當らないものもあります。是はその説く所を容易に飲込ませる方便に用ひるのであつて一向害はありません。畢竟手段でありますから、多少嘘であつても、目的を達する上に差支のない限りはかまはぬわけであります。然し、全く誤つた解釋を用ひたものが本當の様に受取られる事があるのは遺憾であります。これでは悪い結果を起すことがありますから、吾々は、やはり縱令方便に用ひ

るにしても誤つた解釋法や、自己流のみだりな解釋や、又は俗説の解釋法は避けたいと思ふのであります。少くとも、學術上ではさういふのは、どこまでも、拒絶しなければならぬのであります。所が學術的の論說として堂々と名乗り出て「我は學者なり、我は世界の事をみな心得て居る」と云ふやうな風に公言して、しかも、やはり、今申しましたやうな怪しい解釋法を盛に用ひる人が尠くないのは、頗る遺憾に思ふ所であります。此類の中に、日本の人種の由來を説明したり、或は我國民の祖先の仕事の説明したりするのに、左様な方法を用ひる者があります。その内には、我國の祖先が、昔餘程有力な偉い御方であつたと云ふことを言はんが爲に、其祖先を尊ぶ心情が溢れて、勢、曲げた解釋に走りて、左様な結果になるものもありますから、其勢の生ずる因由そのものに於ては咎むべきでないかも知れませぬ。又我國民の由來を説明するに當ても、どうしても、此國土内のことだけでは説明することが出来ぬところから、他の國土の因縁を以て解かんとする等は研究上の方法として、必ずしも不當であると云はれないかも知れませぬ。併ながら今も申しました通り、これが爲に、どこまでも事實としては認めにくい事までを、更に顧みないで、いはゞ放埒に語の解釋を發明顔に施したり、至つて氣儘な比較などをせられることのあるのは眞面目なる論者の爲には、甚だ惜しむべきであります。此等の實例を詳しく申し上げますれば、從來とても幾らもあり、又、今も随分擧ることが出来るのであります。支那の語と日本の語と一緒にして説いて了つたり、或は朝鮮と日本の事を何もかも一つにして了つたりするやうな議論もあるので

ありますが、今は唯餘り濫りな語の解釋法をどこまでも慎むべきことを申し上げたいと思ふのであります。歐羅巴に於て、語の解釋に就て随分氣儘な事をした時代があります。それはよほど以前の事でありますが、何でも基督教が勢力のあつた時分には、歐羅巴の文明の一切殊に精神的文明は之を猶太の語から説明して行かうとしたものであります。何事にあれ、歐羅巴に於ける大切な事柄は皆猶太がもとである、依てそれを表す語は凡て猶太語で解説が出来なければならぬ、さうしてこそ真相がわかるのであるとして、その方法に就て、非常に骨を折つたことがあります。其時分には語を並べて、さうして自由自在にちぎり、除きたい所は切去り、音を加へれば都合のよさうな所へは之を加へ等して、音の抜き差し、置きかへ凡て勝手次第にしたもので、かやうにして或新しい語を作上げて、無理に猶太の語と歐羅巴の或國の語と兩方引きつけて、もとより縁のあるものゝ様に見せやうとしたのであります。立派にさう云ふことを公言して居る人があります。古い人で言ひますと、ギシャル(Guichard)と云ふ人がある。此人は語の説明をする場合に、或る音を頭にくつつ付けたり、尻にくつつ付けたり、或は中程に挿んだり、又其反對に頭の方を削つたり、尻の方を削つたりすることは勝手次第で、どうしても宜しい。文字面で加減乗除を勝手にやつて、それで語の解釋をして宜しい。元來、ヘブライ語は右から左へ横に書き、ギリシヤ語は左から右へ横に書いたものだから、この語を兩方一致させて見るには、その倒のよみ方をして見なくてはいかぬ。つまりは、右から讀んでも、左から讀んでも、意味が當れば解釋に採用して宜しい。と云ふやう

な随分亂暴なことを言つて居ります。何故、それ程亂暴なことを言ふのかと申しますと、今言ひました通り、どうしても猶太の語に溯つて、片付けやうとする下心がありますから、さう云ふ無理までを許してかゝるのであります。横文字を書いてそれを右から讀んでも左から讀んでも意味が付けば宜い、と云ふやうな亂暴なことを言つたのは、やはりヘブライの語に關係を付けやうとしたからであります。これも畢竟は歐羅巴と猶太と言語が同源である、言語のみならず、歐人の血族も亦皆猶太に基くのであると信じもし、又、證明もしようとしたからであります。これを遠い歐羅巴の昔のこととして見て居りますと、甚だ笑ふべきことのやうてありますが、我國に於てもこれに劣らず、やはり左様なことがあるのであります。或前提を立て、おいて、それにおしつけて事を片付けやうとする爲に、無理をして語の頭に思ひもよらぬ音をくつ付けたり、尻に加へたり、或は中ほどをちぎつて見たり、約めて見たり、可成勝手な事をしてまで解釋を立て、ゐるのであります。歐洲又は歐洲近くの古國と我國との關係があつたといふことにして、我が民族の至つて古くより文明に進んでゐたことを云はんが爲に埃及語と日本語とを並べて、互に右の様な方法を施したり、希臘語と日本語とを（その内には漢語より來れる日本語をも構はず入れて）相照合せしめて變化を自由にさせたりして、語の解釋に本づく文明證明法をとつてゐます。印度の語も希臘の語もこのやり方によると、わけなく日本の語と近づきにせられてしまひます。甚しきは日本の地名が古いのも新しいのも印度及それより西の方に根據を有すと云ふやうなことになるのであります。

す。又、その説の一つにかういふのがあります。「ホトケと云ふのは日本語で、昔から誰も本當に解釋した人はないが、あれは佛と云ふのと同じ事である。ブツと云ふ語はブドウと云ふ語と同じ事だ。何故なれば、佛の頭を見ると、髪が葡萄の粒が並んだやうになつて居る。あれは立派な證據である」と云ふやうなことを言つて、ブドウ、ブダ、ホトケ皆同じだと云ふやうなことを申してゐるのであります。まことにおかしいことで、構つて見るほどでもありませんが、語の解釋法は、この位まで及ぶことのあるものであるといふ例に出した次第であります。實にこんな工合で、語と云ふものは妙なもので、一切の規則など關はずにやれば、何とか無理やりの説明が出来るもので、誰も一寸やり兼ねないものであります。貝原益軒が、「橋」は「わたし」の義で、「わ」は「は」に通じて「た」が落ちたので、「はし」となつたのだといひ、「琴」は「こゑ」と「ゑ」が略せられたのだといひ、布は「ぬはぬ」で、縫はないとされてあるが、「は」が略されて「ぬ」が「は」に通じたのだ等といつてゐるのも、その類で、いたづらに類するものであります。それまでの事ならまだ宜しいが、何か他の或説を建立せんが爲に、歴史を思はなければ、こんなに弄び易い言語といふものを材料にして解釋證明にこじつけ様とするのはまことに世の惑をなすものであります。さう云ふことは嚴密な學術研究法の行はれない時代には何處にもあつたので、歐羅巴にも昔あつたのであります。さればこそ、彼の有名なポルテールは大きに語の解釋法を嘲りました。ポルテールの曰ふのに、「語の解釋法と云ふものは妙なものだ、あれには語の母音と云ふものはどうでも宜い、母音

など、イがアにならうがウにならうが、そんな事は關はないものだし、又子音などもどうでも宜いものだ、何もかもどうでも宜いと云ふことになつて了ふ、」と言つてゐます。いかにも、目的の爲に手段を擇ばないと云ふやり方で、語釋をさういふ尤もらしさうな手段として、きまゝにつかつたのであります。ことに無理に或人種と或人種との關係を説き立てやうとするときに、これが使いいゝところから、大きに證明に用ひられて來てをります。こゝに大いに警戒を要するのであります。

凡そ人種の問題を解決するのに、兎角人は直に言語を證明に遣つて、それで一切の片が付くやうに思つてゐるやうでありますが、それはまことに危い誤りであります。チョット考へると、言語が同じである、直ぐ人種が同じであるやうに思はれる。これは全く、日常生活の間の近い例から推してさう思はれるのであります。例へば、初めて會つたその人がこちらの云ふ通りの方言を使ふとする。さうすると、「この人は、どうも、自分の故郷と同じ處の人らしい、同じ言葉を使ふから、同じ處の人らしい」と云ふやうに、直ぐ思ひ付きませう。その考へ方で進むと、今度或る處で知つた語と同じ語をどこかで見付けた場合に、その語が同じいから、これは嘗て知つてゐるのともとを同じくしてゐるに違ひないと云ふことになる。語が同じいか似てゐるかしてゐれば所が同じいといふ推論に馴れると、同言語から直ぐ同國土、次で同人種と云ふことに論を向けて行くことは極く易しいことで、遂に言語さへ同じければ人種も同じだときめる迄にいくのであります。これは、誰もやり勝ちのことであつて、だん／＼推論に馴れていく間にこゝ

まていくのであります。しかし、そこに大きな誤りが起り易いので、又、欺かれ易いのであります。そこで根本問題として、まづ人種のこと、言語のこと、をどこまでも分けて考へなければならぬと思ふのであります。何、それ位は誰も區別してゐるといはれませうが、その實極めてまぎれ易いのでありますから、わかることをとり立て、申すのであります。文字のこと、言語のこと、を兎角世の中の人は混じますから、私共専門の學科として、文字と語とを嚴密に分けなければならぬと云ふことを毎度申します。それと同じやうに、嚴重な監督をして人種と云ふこと、言語と云ふこと、を立派に分けて考へさせなければなりません。此兩つはどう區別せられるかと云へば、チヨット心を用ひれば直ぐに分ることあります。即ち、人種と云ふことは人間の身體に即いた物質的の種類分けである。馬にいろ／＼の馬があり、牛にいろ／＼の牛がある如く、人間にもいろ／＼の人間がある。毛の黒いのもあれば赤いのもある、膚色の白いのもあれば褐色のもある、と云ふやうに様々の別がある。即ち身體に直接即いた種類分けがいろ／＼出来るので、そこに人種といふとがいはれるのであります。即ち人種は血液と極めて密接な關係をもつてゐるものであります。之に反して、言語と云ふものは血液や、身體上の種別とは絶對無關係のものであります。言語は直接生れつきに具つて居るもの、如くに人が思つて居るのは根本的の誤りであります。日本人として日本語を使ふのは是は生れるより以前から、つまり父の胤から含められて居る如くに考へますが、それは誤りであります。吾々の言語は決して持つて來たのではないので、生れてから

後に教へられたものであります。無論祖先以來ズツト續いて一定の言語を用ふる社會に住んで居りますれば、全く新しい人が、風來て、其言語を覺えてかゝるよりは、幾分易いと云ふだけのことは或はありませう、遺傳の規則に依て多少さう云ふことは見られるでありませう、けれども、全然其語を持つて生れると思ふのは全く誤りてあります。何故ならばこれには、幾らも實例がありまして、生れながらでないことを證明してゐます。近頃、日本の人でも、随分外交官若くは外國駐在の武官などの方になると、外國で御子さんが出來て、向ふて、向ふの乳母に預けてお育てさせになる場合がありますが、其場合には、其子供は立派に向ふの言語を使つて、日本語は極めて不自由だといふ様なことが幾らもあります。私の知つて居る人で、國籍は日本にあつて日本で生れた混血兒があります。生れて暫くの間は日本に居つたけれども、後に間もなく獨逸に行つて、それより獨逸に住つて居りましたが、日本語は全く出來ない。容貌等誰が見ても明かに日本人でありますが、周圍の人が皆獨逸語を話すので、自分も獨逸語を覺えて了つて日本語はもう一つも話せないのであります。言語は飽迄も後から教へられるもので血液とは關係のないわけのものであります。是は分りきつた道理でありますが、人はそこに疑を挿むばかりでなく、こゝに本づく誤りをその儘にしておいて、人種論に言語を用ふることがありますから、多少諄く言はなければならぬのであります（未完）